

そこではなく、先の話をしませんか

2024
12.14(土)15(日)

日時

早稲田大学
早稲田キャンパス
121号館

場所

共創学会
第8回年次大会
パンフレット

共創学会
第8回年次大会
早稲田大学
早稲田キャンパス
2024.12.14-15

開会のご挨拶

テーマ：「共創テック～そこではなく、先のお話をしませんか～」

昨今、人手不足の解消や生産性向上を目的として、HRテック、介護テック、エデュテックなど様々な〇〇テックの開発が進み、私たちの生活や社会への導入が進んでいます。例えば、身近なところでは、スーパーマーケットのセルフレジやレストランの配膳ロボットなどがあります。これらの〇〇テックは便利である反面、人同士の共創的な営みや共創の魅力を引き出すには至っておらず、共創が置き去りになっています。

そこで、これまでの〇〇テックの概念を書き換えるものとして、今回の大会では、共創を生み出し、支え、活かす技術を「共創テック」と呼びます。

共創テックでは、人が持つテクニックとモノに宿るテクノロジーの両方の技術が重要となります。さらに、それらを生み出す側と使う側が、ひとつにまとまって関わり合うことになり、アート、デザイン、ファシリテーション、言語、ものづくりなど、生活や社会における多くの活動を含みます。

そして、共創テックを活かすことで生み出される生活や社会、そこに溶け込む共創をイメージしながら、どのようにして共創テックを生み出していくのか、その本質は何か、われわれはこの先何をしたらよいのかを、分野の垣根を越えて大いに議論できればと思います。

実行委員長 三輪洋靖

CONTENTS

<i>INFORMATION</i>	ご案内	03
<i>FLOOR MAP</i>	会場案内図	05
<i>TIME TABLE</i>	タイムテーブル	06
<i>KEYNOTE</i>	基調講演	07
<i>SPECIAL EVENT</i>	特別企画	08
<i>INTERACTIVE</i>	インタラクティブ発表	09
<i>ORAL</i>	口頭発表	21

受付

場所 1F ギャラリー

時間 12月14日(土)12:00開始 / 15日(日)8:45開始

クローク

会議室8にて貴重品以外のお荷物をお預かりすることが可能です。

懇親会

12月14日(土)18:30~20:30 森の風(26号館15F)にて懇親会を開催します。

事前に参加登録を行い、懇親会費をお支払い済みの方のみご参加いただけます。

特別企画

コマツ100周年記念ホールで「テックとの戯れ」をテーマに講演・ワークショップを開催します。

インタラクティブ発表の方へ

インタラクティブ発表の会場は1F ギャラリーです。

本パンフレットでご自身の発表番号(IN-**)をご確認の上、ポスター等の掲示をお願いいたします。

発表終了後、ポスターは各自でお持ち帰りください。

口頭発表の方へ

口頭発表の時間は発表15分・質疑応答10分の計25分です。

発表終了後は次の講演者の方にすみやかに交代できるようご協力をお願いいたします。

その他

・会場内では eduroam を使用できます。ゲスト用アカウントは当日、会場で発行、配布予定です。

・会場内は禁煙です。

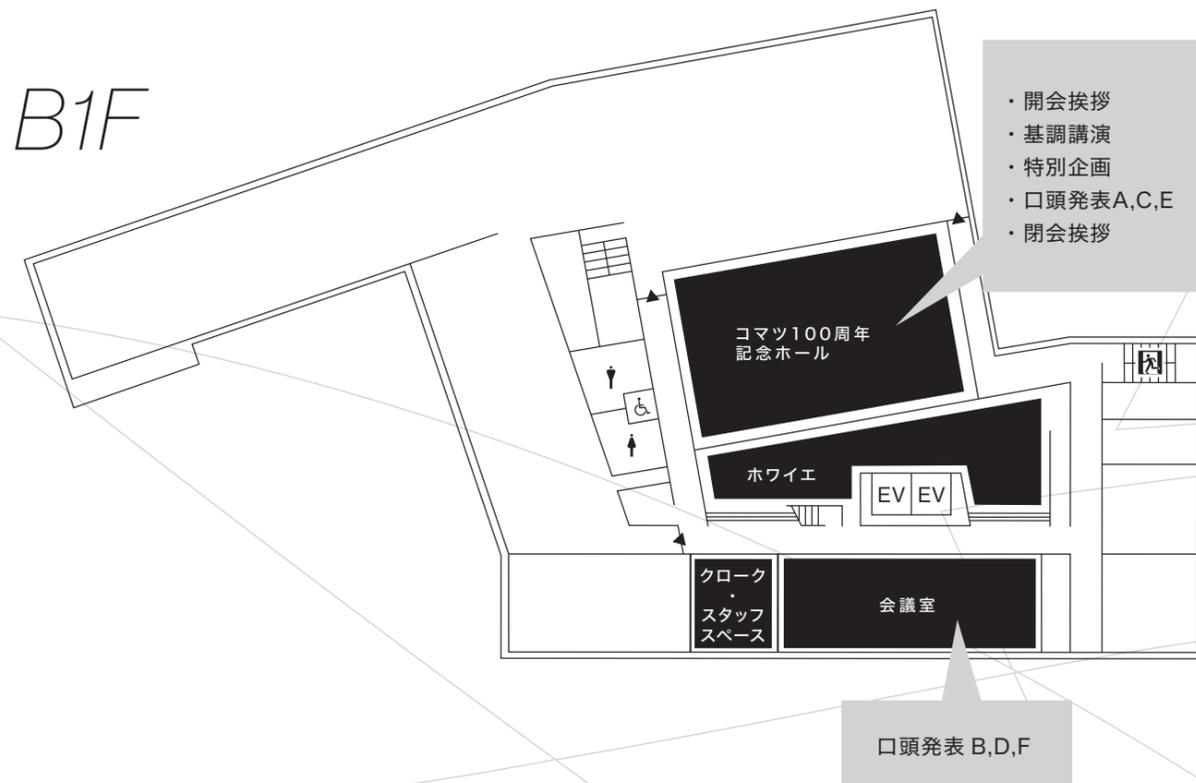
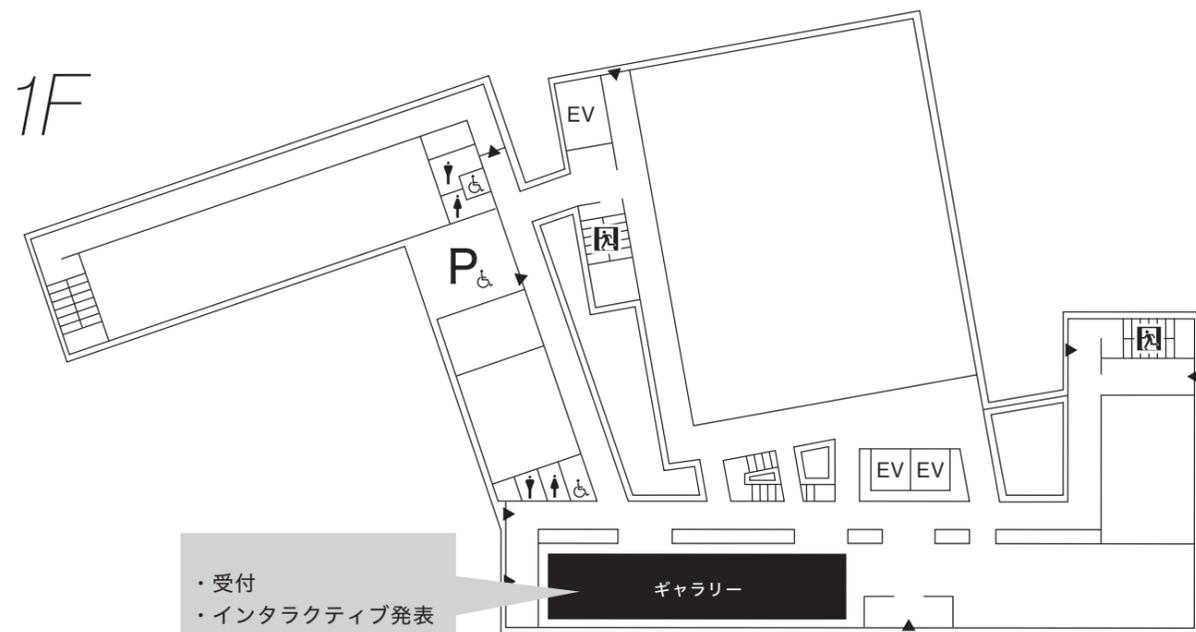
・コマツ100周年記念ホール内は飲食禁止です。

・講演資料等を撮影される場合は予め講演者の許諾を得てから行ってください。なお、実行委員会にて記録等のため、

会場内を撮影・録画する場合がございます。

・会場周辺には飲食店やスーパーマーケット等の商業施設があります。よろしければ、ご利用ください。

FLOOR MAP 会場案内図



TIME TABLE タイムテーブル

12.14 Sat.

12:00	●	受付開始 (場所) ギャラリー
12:50	●	開会の挨拶 (場所) コマツ100周年記念ホール
13:00	●	基調講演 (場所) コマツ100周年記念ホール ・<理解と誤解><妄信と疑念>のはざま で揺れる技術の社会受容 ・講演者: 塩瀬 隆之 (京都大学総合博物館・准教授/理事補(広報))
14:00	●	特別企画 (場所) コマツ100周年記念ホール ・テックとの戯れ ・講演者: 石井 裕之 (早稲田大学 理工学術院・教授)
14:20	●	休憩 ポスター掲示 (場所) ギャラリー
14:40	●	口頭発表 A (場所) コマツ100周年記念ホール 口頭発表 B (場所) 会議室
16:40	●	休憩 ポスター掲示 (場所) ギャラリー
17:00	●	インタラクティブ発表 A (場所) ギャラリー
18:00	●	移動
18:30	●	懇親会 (場所) 森の風 (26号館 15F)
20:30	●	

12.15 Sun.

8:45	●	受付開始 (場所) ギャラリー
9:00	●	特別企画 (場所) コマツ100周年記念ホール ワークショップ: テックとの戯れ
10:30	●	休憩 ポスター掲示 (場所) ギャラリー
10:45	●	口頭発表 C (場所) コマツ100周年記念ホール 口頭発表 D (場所) 会議室
12:15	●	昼食 ポスター掲示 (場所) ギャラリー
13:00	●	インタラクティブ発表 B (場所) ギャラリー
14:00	●	口頭発表 E (場所) コマツ100周年記念ホール 口頭発表 F (場所) 会議室
15:30	●	振り返り
16:00	●	閉会の挨拶 (場所) コマツ100周年記念ホール

<理解と誤解><妄信と疑念>のはざまに揺れる技術の社会受容



講演者：塩瀬 隆之
(京都大学総合博物館・准教授/理事補(広報))

X線が発見されてすぐ、透けて見える面白さから裁判での導入が検討されたり、街中でX線撮影会が開かれたそうです。もちろん、放射線被ばくの危険性が理解されてからは、空港の手荷物検査など人的影響の少ない場面などで重用されますが、医療場面では逆に放射線被ばくという表現を過度に怖がりすぎた一部の患者がCTスキャンなどを撮影拒否してがんの見逃しにつながるなどの問題も指摘されました。X線が発見された1895年から130年たった今でも、生成AIや再生医療などの新しい技術の社会受容は、技術に対する理解と誤解、妄信と疑念のあいだで起きています。果たして共創テックがどのように社会受容に至るのか、技術受容研究から展望します。

経歴

京都大学工学部精密工学科卒業、同大学院工学研究科修了。
機械学習による熟練技能継承支援システムの研究で博士(工学)。
ATR 知能ロボティクス研究所、慶応義塾大学SFC研究所客員研究員など併任。
京都大学大学院情報学研究科助教、京都大学総合博物館准教授を経て2012年6月退職。
同7月より経済産業省産業技術政策課 課長補佐(技術戦略)。
2014年7月京都大学総合博物館准教授に復職。
NHK Eテレ「カガノミカタ」番組制作委員。
日本科学未来館「おや?」こころば総合監修者。

平成29年度文部科学省 中央教育審議会委員(数理探究)、平成30年より現在 経済産業省 産業構造審議会イノベーション小委員会委員、若手ワーキング座長。
特許庁知財創造教育調査委員、文化庁伝統工芸用具・原材料調査委員。
日本医療研究開発機構プログラムオフィサー。
令和2年岐阜市教育委員会 不登校特例校設立準備アドバイザー。
2025大阪・関西万博日本館基本構想有識者委員会座長。
平成29年度文部科学大臣表彰・科学技術賞(理解増進部門)。
日本の人事部「HRアワード2021」書籍部門最優秀賞ほか受賞多数。

テックとの戯れ



そこで今回、普段交わることが少ないテックの創り手と使い手が交わり、それぞれの思いや考えを共有することができるよう、今まさに生み出されようとしているテックに触れる場を用意させて頂きました。さまざまな背景を持った参加者が、それぞれの視点や思いでテックと戯れ、その中で新たな気づきや議論が生まれてくれればと考えています。



秋田 有希湖 (鶴見大学短期大学部)
石井 裕之 (早稲田大学)
植野 貴志子 (ノートルダム清心女子大学)
加藤 健治 (国立長寿医療研究センター)

小井塚 ななえ (東洋英和女学院大学)
郷 健太郎 (山梨大学)
佐藤 あみか (札幌市立大学)
柴藤 寛生 (早稲田大学)

鈴木 優智 (筑波大学)
西 洋子 (東洋英和女学院大学)
三輪 洋晴 (産業技術総合研究所)
三輪 敬之 (早稲田大学)

山口 友之 (筑波大学)
横溝 賢 (札幌市立大学)
ムーンショット目標3 研究開発プロジェクト
「活力ある社会を創る適応自在 AI ロボット群」

テックの本質は、「人間が何かを形作る力」にあります。皆さんは、新たなテックがどのように生まれ、そしてこれからどのように進化していくのか、考えたことはありますか?テックを使うのは人ですが、創り出すのもまた人です。両者の思いが絡み合い、時にぶつかり合うことで、私たちが豊かにしてくれる新たなテックが生み出されるのだと、私たちは考えています。



INTERACTIVE A

インタラクティブ発表 A

12.14 Sat

17:00-18:00

ギャラリー

NO.	TITLE	SPEAKER
IN-01	計算を伴う身体動作の計測	松永 悠生奈 (日本大学) 澤 宏司 (数々企画) 浦上 大輔 (日本大学)
IN-02	音楽遊びにおける Recompose の可能性について考える - 子どものリズムアイデアを元にしたセッションを事例として -	小井塚 ななえ (東洋英和女学院大学)
IN-03	フリースクールにおける児童の発達支援 - 商いを通じた支援プログラム「こども八百カフェ」の実践 -	加藤 ふらの (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 片山 めぐみ (札幌市立大学)
IN-04	模様を介した人と土地のつながりを描き出す 社会的なデザイン実践 - ゼンタイポを用いた表現活動を通して -	田川 善 (札幌市立大学デザイン学部) 横溝 賢 (札幌市立大学)

NO.	TITLE	SPEAKER
IN-05	身体表現に関するアウェアネスの現状とその先	秋田 有希湖 (鶴見大学短期大学部)
IN-06	打鍵時の運指とタイミングを考慮した ピアノ演奏支援システムの設計	鈴木 優智 (筑波大学知能機能システム学位プログラム) 山口 友之 (筑波大学システム情報系)
IN-07	輻輳的学習意識が創発されるハイフレックス型授業	福田 大年 (札幌市立大学)
IN-08	共創の価値を可視化するエージェントベースモデルの開発	千葉 涼 (東北大学工学部・東北大学流体科学研究所) 鈴木 杏奈 (東北大学流体科学研究所)
IN-09	小学校低学年における子ども・保護者・教師の 協働記録に関する一考察	小沼 律子 (お茶の水女子大学附属小学校)
IN-10	参与観察による企業内リードユーザー探索方法の検討 - 物流倉庫での参与観察実践事例を通じて -	大塚 愛子 (株式会社リコー) 北野 祐子 (株式会社リコー) 川口 敦生 (株式会社リコー) 林 貴彦 (株式会社リコー)
IN-11	共創的遊び拡張をうみだす インタラクティブデバイスの共創開発	石井 裕之 (早稲田大学) 紫藤 寛生 (早稲田大学大学院) 西 洋子 (東洋英和女学院大学)
IN-12	へび型ロボットの柔らかさを活かしたフィジカルケア	窪田 芽生 (筑波大学計測工学研究室) 山口 友之 (筑波大学計測工学研究室)
IN-13	身体性に基づく共創的な文字構成	郷 健太郎 (山梨大学) 河野 凌樹 (山梨大学) 木納 直弥 (山梨大学) 田邊史龍 (山梨大学) 廣井 奏 (山梨大学) 弓削 慶太 (山梨大学)
IN-14	健康長寿を支えるモーションキャプチャ - 技術の進化と未来への展望 -	霜島 大希 (国立長寿医療研究センター) 藤澤 壮志 (国立長寿医療研究センター) 吉見 立也 (国立長寿医療研究センター) 加藤 健治 (国立長寿医療研究センター)

IN-01 計算を伴う身体動作の計測

○松永 悠生奈（日本大学）
澤 宏司（数々企画）
浦上 大輔（日本大学）

本研究では、数々企画の澤宏司が考案した「数楽たいそう」の身体動作を、Google の姿勢推定モデル PoseNet を用いて計測する。数楽たいそうは、簡単な計算を伴う全身運動プログラムで、自然数の2進数展開を体の各部位に割り当てることによって運動を実現する。一方、PoseNet は、身体に機器を装着することなく、動画から身体部位の座標を検出することができる。本研究では、「運動を完遂するために計算が必要」という数学たいそうの特徴を定量的に理解するために、数学たいそうを含む3種類の身体動作を PoseNet によって計測して比較する。

IN-02 音楽遊びにおける Recompose の可能性について考える - 子どものリズムアイデアを元にしたセッションを事例として -

○小井塚 ななえ（東洋英和女学院大学）

本稿では、子どもの音楽的なアイデアを基盤として新しい音楽を生み出す Recompose の過程に着目し、その可能性を探ると共にそれを支える音楽的な専門性について検討する。子どもが自由に奏でたリズムを素材としてファシリテーターが即興的に展開する音楽と身体表現の表出プロセスに着目した。刻々と進む時間の中で、表現者／ファシリテーターとして決定し表出していく過程での「難しさ」にはいくつかの段階があることが示唆された。ファシリテーター（演奏者を含む）が、子どものアイデアを感覚として理解し Recompose して場に戻すプロセスにおいては、楽器（太鼓）の介在が重要な役割を担っていることも明らかになった。

IN-03 フリースクールにおける児童の発達支援 - 商いを通じた支援プログラム「こども八百カフェ」の実践 -

○加藤 ふらの（札幌市立大学大学院デザイン研究科）
片山 めぐみ（札幌市立大学）

本研究は、フリースクールにおける商業体験を通じた支援プログラムのデザインと実践による効果検証が目的である。現在フリースクールでは地域社会での体験学習に関する仕組みづくりが課題とされている。そこで「商い」を対象に公教育で重視される「生きる力」を醸成できる支援プログラムを計画・実践し、その体験が児童の発達にどのように寄与するかを検討した。研究方法に「アクションリサーチ」を採用し、プログラムの実態をスタッフや児童、その保護者へのヒアリングを通じて分析する。本稿ではアクションリサーチの初期段階として現状の実施内容とプログラムの構築における課題や発展性についての考察を行い、今後の展望についても報告する。

IN-04 模様を介した人と土地のつながりを描き出す 社会的なデザイン実践 - ゼンタイプを用いた表現活動を通して -

○田川 善（札幌市立大学デザイン学部）
横溝 賢（札幌市立大学）

本稿では、筆者の模様表現展開を省察するとともに、模様表現活動を通して人と土地のつながりを描き出す社会的なデザイン実践について記述している。筆者の模様表現には直接的に意味を持つ存在図柄と意味を持たない非存在図柄が混在し、描く行為に意識的・無意識的な両表現が組み込まれている。土地を表現する方法に前記の模様表現展開を用い、地名の文字の中に模様を充填したことで、土地を知る人に深く伝わる媒体を作ることができた。文字の中に模様を充填する表現をゼンタイプと命名し、大学内で模様表現ワークショップとして実践活動を行った。結果、描かれた模様は土地と深く結びつき、人と土地をつなぐ媒体になり得るといったことがわかった。

IN-05 身体表現に関するアウェアネスの現状とその先

○秋田 有希湖（鶴見大学短期大学部）

共創的な身体表現活動では、活動中の感想や実践後の振り返りなどにおいて、ファシリテーション実践者や参加者から様々な気づきが語られる。これらの気づきを契機に表現や表現を取り巻く環境との関わりに生き生きとした変化が見られることも多い。質の高い気づきとの出会いは、共創的な身体表現活動を育む重要な要素であると言える。そこで本稿では、共創と気づきのテクニクとの関連を探るための予備的調査として、身体や動きを用いる5つのアウェアネスの特徴を整理した。結果これらの手法は、自己の身体や意識の状態・変化に関する気づきを生むこと、自己以外の他者や環境を意識することで自己の気づきを促すものがあること等がわかってきた。

IN-06 打鍵時の運指とタイミングを考慮した ピアノ演奏支援システムの設計

○鈴木 優智（筑波大学知能機能システム学位プログラム）
山口 友之（筑波大学システム情報系）

ピアノ演奏は打鍵や運指など様々な技術を必要とするため、多くの初心者が演奏技術の習得に伴う難易度の高さから途中で学習を断念してしまうことが課題である。そこで本研究では、ピアノ初心者にとって課題となる運指や打鍵についての補助を行うシステムを提案する。特に演奏時に重要とされる腕位置、運指、打鍵タイミングに着目し、機能的電気刺激とモータを活用したリアルタイム補助システムの開発を行った。本稿では、提案手法における各補助機能について検証実験を実施し、その結果を示す。

IN-07 輻輳的学習意識が創発されるハイフレックス型授業

○福田 大年（札幌市立大学）

本研究の目的は、筆者が開発した移動式配信システム「協創ワゴン」で実現したハイフレックス型授業を対象に、多様な受講方法で参加した学生の学習意識アンケートとインタビューから、場所、時間、手段が異なる学習者らが創作意欲を掻き立て合う場の形成に必要な要素を明らかにすることである。「協創ワゴン」を導入した授業の受講生100人のうち19人にアンケート、6人にインタビューの協力が得られた。調査の結果、協創ワゴンを用いたハイフレックス型授業は、授業に関わる場所、時間、人との距離感を学習者自身にデザインさせることを促し、学習者らの多様な学習意識を輻輳化させ、共創の場を創発させる可能性が示唆された。

IN-08 共創の価値を可視化するエージェントベースモデルの開発

○千葉 涼（東北大学工学部，東北大学流体科学研究所）
鈴木 杏奈（東北大学流体科学研究所）

共創プロジェクトは、プロジェクトの目的や権力、政治、手順に対するアプローチの仕方に基づいて分類される。本研究では、モードごとに共創を表現するエージェントベースモデルを開発し、プロジェクトが参加者に還元する成果に対して、個人間の意見の相互作用が及ぼす影響と、共創のモードの違いによる意見の変容の傾向を明らかにした。このモデルの活用により、異なる共創の条件による参加者の意見伝搬の傾向を評価でき、共創プロジェクトの適切なデザインの一助となることが期待できる。

IN-09 小学校低学年における子ども・保護者・教師の協働記録に関する一考察

○小沼 律子（お茶の水女子大学附属小学校）

保育の現場では、保育士体験や絵本の読み聞かせの会など、様々な形態で保護者が保育に参加する機会がある。一方、小学校では、保護者会や個人面談など、子どもがいない中での教師と保護者間のやりとりがほとんどである。そこで、本研究では、保護者と共に子どもの姿を見とり、協働して記録することで、保護者が教師と共に子どもの学ぶ姿を共有し、記録に関与していく際の変化を捉えたいと考えた。この協働記録の試みにより、子どもの学ぶ姿が可視化され、より多くの保護者や教師に子どもの学ぶ姿が共有されることとなった。また、保護者が子どもの姿を協働して記録することにより、保護者による記録行為の変化や子ども理解の深まりが報告された。

IN-10 参与観察による企業内リードユーザー探索方法の検討 - 物流倉庫での参与観察実践事例を通じて -

○大塚 愛子（株式会社リコー）
北野 祐子（株式会社リコー）
川口 敦生（株式会社リコー）
林 貴彦（株式会社リコー）

本研究は、「企業内リードユーザー」の特定を、共創プロセスに「共感」のための参与観察中に行うことの有効性を提案するものである。特に、観察対象の「革新的な行動や使用法」「動機や問題意識の深掘り」を行うことで、リードユーザーを明確に特定できることが示唆される。事例として物流倉庫での7日間の参与観察を通じて、これらのアプローチによりリードユーザーの特定が可能であることを示した。また、リードユーザーは他の社員からも自然に目立つ存在であり、参与観察はその特定手法として有効であることを示した。今後は、他の分野においても同様の効果が得られるかの検証を進める予定である。

IN-11 共創的遊び拡張をうみだす インタラクティブデバイスの共創開発

○石井 裕之（早稲田大学）
紫藤 寛生（早稲田大学大学院）
西 洋子（東洋英和女学院大学）

子どもの遊びの場面では、道具を使用した遊びの拡張がしばしば見られるが、道具にもともと想定されていた遊びだけでなく、即興的な遊びが発現することも多々ある。このような即興的な遊びの拡張は、一つの共創とみることができる。さらに道具の開発者の意図をはるかに超えた新たな遊びの形態を生み出すことがあり、ここには子どもと開発者の間の共創を見出すことができる。本研究では、インタラクティブな遊び道具を対象に、使用する子ども同士の共創と、子どもと開発者の共創の2つの共創を意図して開発する方法論の構築を目的としている。現在、自律移動が可能なボール形ロボット、柔らかい身体を有するバルーン型ロボットの開発を進めている。

IN-12 ヘビ型ロボットの柔らかさを活かしたフィジカルケア

○窪田 芽生（筑波大学計測情報工学研究室）
山口 友之（筑波大学計測情報工学研究室）

長時間同じ姿勢を取り続けると、血栓が生成しエコノミークラス症候群（DVT）という病態になる可能性がある。DVTは飛行機やバス、車、避難所でも危険性がある。予防方法として自主的に行うストレッチ運動、弾性ストッキング、マッサージ器があるが、DVTが起こりうる限られた空間では使用することができない。また自覚がない状態では従来の手法が活用されないという課題等がある。よって自主的に使用するものではなく、限られた空間で自律的に移動し、物理的かつ能動的にケアが可能なフィジカルケアロボットの開発が重要である。そこで本論文では、人に巻き付いて圧迫し、個人に合わせてフィジカルケアを行うヘビ型ロボットを提案する。

IN-13 身体性に基づく共創的な文字構成

○郷 健太郎（山梨大学）
河野 凌樹（山梨大学）
木納 直弥（山梨大学）
田邊史龍（山梨大学）
廣井 奏（山梨大学）
弓削 慶太（山梨大学）

本研究では、2本のジョイスティックを用いた日本語文字入力手法「IToNe（いとね）」に対して、身体性と共創の観点での拡張を試みる。IToNeは、子音と母音を組み合わせる1文字のかなを構成する手法であり、2本のジョイスティックLとRの操作空間を上下半円に分割し、子音を上半円、母音を下半円に割り当てることで、同時操作によって子音と母音で構成されたかな文字を決定する。適切な操作空間の分割と同時並行操作により、全てのかなを1アクションで入力可能である。本研究では、上肢・下肢を用いた入力や複数人による協調操作などの多様な視点でデザイン空間を探索し、文字入力を活用した共創の可能性を探る。

IN-14 健康長寿を支えるモーションキャプチャ - 技術の進化と未来への展望 -

○霜鳥 大希（国立長寿医療研究センター）
藤澤 壮志（国立長寿医療研究センター）
吉見 立也（国立長寿医療研究センター）
加藤 健治（国立長寿医療研究センター）

マーカースレスモーションキャプチャを用いて、若年者と高齢者の平地歩行およびスロープ歩行における下肢関節の可動域を比較した。その結果、スロープ上り歩行時の足関節可動域において最も顕著な差異が確認され（効果量：0.53, 大）、平地歩行時の膝関節可動域でも差異が認められた（効果量：0.34, 中）。スロープ上り歩行における足関節可動域の制限は、加齢に伴う筋力低下や筋活動パターンの変化に起因する可能性がある。マーカースレス技術は従来の光学式マーカースレスと比較して被験者への負担が少なく、より自然な動作の計測を可能とした。本研究で示された定量的評価手法は、健康長寿支援における新たな指標として活用できる可能性がある。

INTERACTIVE B

インタラクティブ発表 B

12.15 Sun

13:00-14:00

ギャラリー

NO.	TITLE	SPEAKER
IN-15	1 歳児の食事場面にみる保育者との相互行為 - 新年度の子どもの姿に着目して -	井出 真結子 (東洋英和女学院大学大学院) 西 洋子 (東洋英和女学院大学)
IN-16	乳児と母親のあいだに生まれる音楽的コミュニケーション	篠原 暁子 (国立学園附属かたばみ幼稚園) 西 洋子 (東洋英和女学院大学)
IN-17	幼稚園 3 歳児 1 学期に見られるやさしさの関係論的分析 - 倉橋惣三の好意論による検討 -	西山 萌 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科) 刑部 育子 (お茶の水女子大学基幹研究院)
IN-18	「観」の共創による共有メンタルモデルの 形成プロセスの考察	塙 達晴 (株式会社 MIMIGURI, 一般社団法人いと経営学会) 瀧 知恵美 (株式会社 MIMIGURI) 水波 光 (株式会社 MIMIGURI)

NO.	TITLE	SPEAKER
IN-19	感覚と身体 つながるとのこと③ - 学生アンケート 2 年分の考察 -	浅井 忍 (草苑保育専門学校)
IN-20	反芻を促すグラフィック記録の実践 - 一瞬の仕草を描き出す ChewChew レコーディングの試み -	渡邊 紗弓 (札幌市立大学デザイン学部) 横溝 賢 (札幌市立大学)
IN-21	他者の生活世界を覗き二人称的アプローチによって 内省的行為を促す言葉づくりとデザイン	坪野 加奈 (札幌市立大学デザイン学部) 横溝 賢 (札幌市立大学)
IN-22	箱庭療法における前頭極の脳活動と共創 - 近赤外分光法 (NIRS) を用いた混合型研究 -	秋本 倫子 (東洋英和女学院大学) 小林 能成 (東洋英和女学院大学) 石原 宏 (島根大学) 伊藤 淳子 (埼玉工業大学)
IN-23	武テック - 共創を生み出す「びわこバリアフリー剣道クラブ」の取り組み -	三苫 保久 (滋賀県立大津清陵高等学校) 洲上 博昭 (心合武館) 山上 良子 (びわこバリアフリー剣道クラブ) 東山 明子 (大阪商業大学)
IN-24	臨床における属人化された情報の可視化と AI 活用に向けた検討	押山 千秋 (北陸先端科学技術大学院大学) 西村 拓一 (北陸先端科学技術大学院大学)
IN-25	逆 Bayes 推論フィードバックを実装した 粘菌モデルにおける逸脱の機構	谷 伊織 (神戸大学)
IN-26	介護サービスにおける見守りサービスの受容性	三輪 洋靖 (産業技術総合研究所) 渡辺 健太郎 (産業技術総合研究所)
IN-27	短歌とデザイン研究会、ZINE を作る - まだらにではあるが豊富な資源のある環境における「技能」や 「テック」の連関について -	池原 優斗 (北海道大学) 西 希 (北海道大学) 北澤 光記 (北海道大学) 對馬 和佳奈 (個人) 藤沢 レオ (札幌市立大学) 横溝 賢 (札幌市立大学)
IN-28	人と個物との結びつきから生まれる「間」の成り立ち - ランプリングデザイン運動がもたらす偶発的な出会いとつながり -	境 美月 (札幌市立大学デザイン学部) 高瀬 愛菜 (札幌市立大学デザイン学部) 村上 璃紗 (札幌市立大学デザイン学部) 山本 愛心 (札幌市立大学デザイン学部) 横溝 賢 (札幌市立大学)

IN-15 1歳児の食事場面にみる保育者との相互行為 - 新年度の子どもの姿に着目して -

○井出 真結子（東洋英和女学院大学大学院）
西 洋子（東洋英和女学院大学）

本研究では、1歳児クラスの食事場面において新年度の期間、まだ信頼関係が構築されていない保育者と子どもにどのようなやりとりが生じているのか参与観察を通じて検討した。収集した事例をKJ法で分類し、抽出したカテゴリーをもとにエピソードの質的研究を行った。結果として、子どもの身体から発する力や目に見えない心の動きを感じ取るうとする保育者のかかわりが、子どもの自発的に食べることへ向かう姿に繋がることが示唆された。

IN-16 乳児と母親のあいだに生まれる音楽的コミュニケーション

○篠原 暁子（国立学園附属かたばみ幼稚園）
西 洋子（東洋英和女学院大学）

本研究は、「コミュニケーション・ミュージカルティ」の概念に基づいてナラティブの観点から、研究対象児（0歳7か月～9か月）と母親の音楽的なかかわりについて考察し、乳児と養育者のあいだにはどのような音楽的コミュニケーションが生成されるのか明らかにすることを目的とする。母親による観察記録から抽出されたエピソードについてKJ法による内容分析を行った結果、乳児と母親とのあいだに生まれる音楽的コミュニケーションは、「共に音楽を創り合う」関係により成立していることが明らかとなり、具体的な事例をあげてナラティブの観点から分析を行ったところ、「共に創り合う新しい音楽」を経て終息に向かう瞬間を確認することができた。

IN-17 幼稚園3歳児1学期に見られるやさしさの関係論的分析 - 倉橋惣三の好意論による検討 -

○西山 萌（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科）
刑部 育子（お茶の水女子大学基幹研究院）

本稿は、本学会前年次大会で発表した、幼稚園3歳児クラス1学期における、子どものやさしい情感（好意）が立ち現れていた3事例について、関係論的視点から再分析を試みたものである。事例の関係論的分析を通じて、子どもは他者から好意を受けることで気持ちに余裕をもてる可能性、気持ちに余裕がある中で好意が立ち現れやすい可能性、日頃より好意の受け取りあいが起こっている関係性において、好意が立ち現れやすく、またその好意が敏感に受け取られやすい可能性が見出された。これらより、好意の受け取りあいが多く起こる共同体の重要性が示唆された。

IN-18 「観」の共創による共有メンタルモデルの形成プロセスの考察

○埜 達晴（株式会社MIMIGURI、一般社団法人いと経営学会）
瀧 知恵美（株式会社MIMIGURI）
水波 洸（株式会社MIMIGURI）

本研究は、「観」の共創活動を通じた共有メンタルモデルの形成が組織に与える変化を探るものである。筆者は、組織が規範や文化を持つことで一体感が生まれる一方で、同調圧力や組織の力学により個々の認知や価値観が抑えられ、多様な発想や活力が損なわれることに課題を感じてきた。本稿では、経営コンサルティング事例を通じ、個人の「観」を引き出し集団として統合することで共有メンタルモデルが形成されるプロセスを考察する。他者の「観」に触れ、可視化することで、潜在的なコミュニケーション前提の違いが認識され、共創基盤が生まれる可能性が示唆された。

IN-19 感覚と身体 つながるといふこと③ - 学生アンケート 2年分の考察 -

○浅井 忍（草苑保育専門学校）

筆者は保育士養成校の学生と幼稚園入園前教室の子ども双方のフィールドから教育と保育に携わる立場である。場所と時間を超えて身体でつながる「感覚」に視点を向けることが、学生へ伝える手段として有効であると気づきを得たことから、学生へ説明的なことばで伝えることを課題とし、保育士養成校の学生へつながる「感覚」について継続したアンケート調査を行っている。本稿は前稿の課題から、コミュニケーションと身体について追及すべく2年次へと進級した学生の調査から考察を行った。結果、学生が子どもとつながる・つながらない感覚の有無に関わらず、身体を通じた体験を経て学びを深めていることがわかった。

IN-20 反芻を促すグラフィック記録の実践 - 一瞬の仕草を描き出す ChewChew レコーディングの試み -

○渡邊 紗弓（札幌市立大学デザイン学部）
横溝 賢（札幌市立大学）

本稿では、筆者（第一著者・渡邊）が実践する記録手法「ChewChew レコーディング」の経緯と特徴を述べる。従来の記録手法であるグラフィックレコーディングやリアルタイムドキュメンテーションと異なり、渡邊の記録は目の前の人の一瞬の仕草を「反芻」しながら捉え、描き出すことを重視する。そのため、記録は説明的な情報が減り、アニメーションなどの形式にも発展し、描かれた対象者にも反芻を促す。今後は、2024年11月中旬に北海道森町に訪れて実践を行う予定である。筆者のChewChew レコーディングを記録の対象者に見せることで、どのような会話が生まれ、影響を与えることができるのかを探りたい。

IN-21 他者の生活世界を覗き二人称的アプローチによって 内省的行為を促す言葉づくりとデザイン

○拝野 加奈（札幌市立大学デザイン学部）
横溝 賢（札幌市立大学）

近年、高度情報社会やインターネットの普及により、オンライン上での誹謗中傷が問題となっている。匿名アカウントを使用し、面識のない他者に無意識・無責任に言葉を投げかけている。本研究では、そのような無意識な発言や行動、加えて目を逸らしている事象を再認識させるような言葉づくりについて探究した。他者がその言葉で沈思し、内省的行動へとつながる機会をかたちづくることを目指した。筆者が通う大学のオープンキャンパスにてデザインをする上で必要な倫理観に関する言葉のポスターを掲示し、他者が何を沈思したか調査したところ、内省的行動を促し他者の生活世界を覗くことができていくことがわかった。

○: 発表者を表す

IN-22 箱庭療法における前頭極の脳活動と共創 - 近赤外分光法 (NIRS) を用いた混合型研究 -

○秋本 倫子 (東洋英和女学院大学)
小林 能成 (東洋英和女学院大学)
石原 宏 (島根大学)
伊藤 淳子 (埼玉工業大学)

研究目的：模擬的箱庭療法セッションにおいてクライアント (Cl) とセラピスト (Th) の左右前頭極の脳血流変動を 2 チャンネル NIRS により同時計測し、行動および質問紙への回答と併せて両者の相互作用を検討した。結果：Cl-Th ペアと偽 Cl-Th ペアの脳活動の同期の程度に有意差は認められず、左右前頭極に関して、箱庭療法で Cl-Th 間で脳活動の同期が生じる特異的な行動も同定できなかった。質問紙では、Cl と Th の気分や箱庭の印象にある程度的一致が見られた。Cl と Th は役割が異なることから前頭葉の複雑な認知活動が一致しない可能性はある。箱庭療法における共創は単純な同期としては捉えられないのだろう。

IN-23 武テック - 共創を生み出す「びわこバリアフリー剣道クラブ」の取り組み -

○三苫 保久 (滋賀県立大津清陵高等学校)
淵上 博昭 (心合武館)
山上 良子 (びわこバリアフリー剣道クラブ)
東山 明子 (大阪商業大学)

びわこバリアフリー剣道クラブのテーマは、「相手から学ぶ」である。クラブを構成するメンバーは、高齢者、障害者、外国人留学生、高校生、特別支援学校生など多彩である。いきづらさをもっていきている人が、ともにつどい、お茶を飲み、近況をかたりあう。場はおのずと和やかなものとなる。ところが、剣道の稽古に入ると場は一転する。互いに向きあい、相手からの気を感じあい、相手と「ひとつ」になることをめざす。相手と対峙し、否定し、反発・抵抗しあうと、当たり、カミ (りきみ) となり、技は成り立たない。カミを抜き、反発を消し、共創をめざすと和合が始まる。これらの和やかさと共創が両立してこそ「武テック」である。

IN-24 臨床における属人化された情報の可視化と AI 活用に向けた検討

○押山 千秋 (北陸先端科学技術大学院大学)
西村 拓一 (北陸先端科学技術大学院大学)

心理 教育分野の専門家に求められる臨床実践に資する知として「臨床の知」という概念がある。「臨床の知」の中には、多くの「暗黙知」が含まれる。臨床家が自身の経験的知識を含む知識を形式的・暗黙的に問題解決型のケアに活用している。我々は知識ベースを連携させる「知識表現」と呼ばれる手法に着目し、臨床熟練者が持つ暗黙知を抽出し、適切な位置に置くことで暗黙知など属人化されたものも含めた臨床行為を記述することに取り組んできた。今回、臨床の知識構造化について、研究結果を振り返りながら、人間と機械の両方にとっての知識の理解、推論、解釈を向上させた臨床における AI 活用に関する提案を行いたいと考える。

IN-25 逆 Bayes 推論フィードバックを実装した 粘菌モデルにおける逸脱の機構

○谷 伊織 (神戸大学)

本稿では、逆 Bayes 推論に基づくフィードバック機構を実装した真性粘菌 *Physarum polycephalum* 変形体の数理モデルを対象に、本モデルが U 字型トラップ課題をクリアする際の運動を例に、粘菌が誘引物質濃度勾配に逆行する際のメカニズムをその潜在的な移動方向を示すベクトルの多様性に基づいて検証する。

IN-26 介護サービスにおける見守りサービスの受容性

○三輪 洋靖 (産業技術総合研究所)
渡辺 健太郎 (産業技術総合研究所)

日本では、高齢化率の増加、就労人口の減少により、介護サービスにおける人材不足が社会課題となっており、テクノロジーの活用による解決が期待されているが、その活用は進んでいない。そこで、テクノロジーの利用を阻害する受容性について、見守りサービスに焦点を絞ったアンケート調査を実施し、統計的手法を用いて、見守りサービスへの期待、場所やセンサ、情報の種類による受容性の違い、受容性と個人特性の関係を分析した。そして、将来のテクノロジーを活用したサービスの普及に向け、社会、テクノロジー、個人の3つのステークホルダの観点から課題を検討した。

IN-27 短歌とデザイン研究会、ZINE を作る - まだらにではあるが豊富な資源のある環境における「技能」や「テック」の連関について -

○池原 優斗 (北海道大学)
西 希 (北海道大学)
北澤 光記 (北海道大学)
對馬 和佳奈 (個人)
藤沢 レオ (札幌市立大学)
横溝 賢 (札幌市立大学)

本発表では、「短歌とデザイン研究会」における ZINE 制作プロジェクトの実践を報告し、異なる専門性や経験を持つメンバーがどのように協働し、分業的に共創を行ったかを考察する。制作の過程では、シルクスクリーン印刷の技術 (テック) と、それを扱う技能が重要な役割を果たした。今回のプロジェクトは、使われなくなっていたシルクスクリーン設備を再び利用可能なものにしながらか進められた。また、あるものについては豊かである一方で、別のものについては偏りがあり乏しい資源によって、今回の実践が分業的な形での共創の形態となったことを示す。最後に、今回の事例を踏まえて「共創テック」についても検討を行う。

IN-28 人と個物との結びつきから生まれる「間」の成り立ち - ランプリングデザイン運動がもたらす偶発的な出会いとつながり -

○境 美月 (札幌市立大学デザイン学部)
高瀬 愛菜 (札幌市立大学デザイン学部)
村上 璃紗 (札幌市立大学デザイン学部)
山本 愛心 (札幌市立大学デザイン学部)
横溝 賢 (札幌市立大学)

筆者らのゼミ活動では、予想外の出会いを通じて新たな気づきを得ることを重視している。ゼミ活動のはじまりは特に何かをデザインするという目的をもち、札幌市内や北海道森町周辺をぶらつくことだった。筆者らはそれぞれの道中において、次々と出会う予測できない事象との関わり合いの体験を省察したノートをもち寄り、それら連続した体験過程に潜在する流動的な「間：ま／あわい」の成り立ちを描き出すことを試みた。本稿では「間」という複雑な事象との流動的な相関の様態を分析し、未知の現場を自らの生活世界として生成していく知の成り立ちを考察する。

ORAL A

口頭発表 A

12.14 Sat

14:40-16:40

コマツ 100 周年記念ホール

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-01	大道芸のジャグリングに見られる加速手拍子の研究	矢向 正人 (九州大学) 竹下 秋雄 (福岡教育大学)
OR-02	死考による弔いを醸成する空間	来田 玲子 (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 大島 卓 (札幌市立大学) 福田 大年 (札幌市立大学)
OR-03	ラフ集合束によるマンガ表現分析 - 面白さはどういった構造から現れるか -	真嶋 悠 (早稲田大学) 郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)
OR-04	死ぬことに意味があるのか？	金尾 雄二 (宗教法人日本同盟基督教団土浦めぐみ教会 障害者総合支援法指定事業所「からしだね」)

○：発表者を表す

OR-01 大道芸のジャグリングに見られる加速手拍子の研究

○矢向 正人 (九州大学)
竹下 秋雄 (福岡教育大学)

本稿では、大道芸のジャグリングにみられる観客の加速手拍子の特性を解明する。2023 年 8 月にエディンバラで収録した 42 件のパフォーマンスから 50 の加速手拍子事例を音響解析とクラスタ分析で検討した結果、1) 打ち始めの間隔は 5 秒から 0.5 秒とばらつきがあるが、最終段階の打拍間隔は 0.6 秒から 0.2 秒と差が小さいこと、2) 加速は一定の倍率で加速し続けるのではないこと、3) 加速の前半と後半で異なる変化特性を示すこと、4) 加速形成の特徴は前半部分に特に強く表れることが明らかとなった。結果をもとに、観客の期待感の推移やジャグラーとの相互作用、高リスクなパフォーマンスで加速が頻発する理由を考察した。

OR-02 死考による弔いを醸成する空間

○来田 玲子 (札幌市立大学大学院デザイン研究科)
大島 卓 (札幌市立大学)
福田 大年 (札幌市立大学)

近年の社会構造の変化に伴い、死の問題が大きくなっている。本研究では、特に「死考」の減少と「弔い」の衰廃という二つの問題について取り上げる。「死考」とは死の恐怖の克服や生の意味を問い直す思考を指すが、無宗教化や人間関係の希薄化により、その機会は減少した。加えて、都市化や核家族化が進んだことで、集団的な弔いが失われ、弔いが親族のみの負担になっている。卒業研究では、「死考と弔いを醸成する空間」をテーマに新しい葬送システム空間を視覚化し、議論を誘発するスペキュラティブデザインを行った。修士研究ではこのテーマをより探求していき、死考を日常化させることによる未来の死の在り方の共創を目指す。

OR-03 ラフ集合束によるマンガ表現分析 - 面白さはどういった構造から現れるか -

○真嶋 悠 (早稲田大学)
郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)

マンガは、表象としてのビジュアルイメージと文字情報としてのテキストから構成され、「コマ」と呼ばれる枠組みで物語の進行を表現する。本研究では、短編マンガを基盤に「コマ」同士の関係性がどのように描かれ、マンガが有する「面白さ」に繋がるのかラフ集合束を用いて分析する。また、研究結果を用いて実際にマンガを制作し、「面白さ」の顕現を試みる。

OR-04 死ぬことに意味があるのか？

○金尾 雄二
(宗教法人日本同盟基督教団土浦めぐみ教会
障害者総合支援法指定事業所「からしだね」)

「死とは何か？」を形而下の視点から見ると、身体が作動しそれから壊れる。死とは、ただそれだけのこと。形而上の視点から見ると、人々との地上での人生を終えて創造主とともに生きる天の人生に魂が入る門である。死とは、人間が生きるを営む舞台とその向こう側を隔てる幕で、こちらからは見えないが向こう側からは見えるハーフミラーの薄い膜のような作用をする。死の向こう側から見ると異なる他者との対話が促され、死で分離されていた異なる他者と死を通して融合できる可能性が生まれるならば、「死ぬことに意味があるのか？」という問いは、新たな生きるを生み出す共創社会の糸口への導入路となり得る。

ORAL B

口頭発表 B

12.14 Sat

14:40-16:40

会議室

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-05	日中における「鬼」の概念とその文化的解釈の差異 - 抽象化と物象化の視点 -	セツ ジャーニー (早稲田大学基幹理工研究科) 郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)
OR-06	クラシック音楽領域における協働的な キュレーションの可能性 - 「あちらこちら」の実践を通して -	篠原 美奈 (東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科)
OR-07	手書き文字を用いた表現ワークショップにみる 相互理解と受容生成過程の考察 - 「浮書き」ワークショップ実践を例に -	佐藤 あみか (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 横溝 賢 (札幌市立大学)
OR-08	映像制作の共創過程 - めかるみで生まれる創造 -	岡本 誠 (公立はこだて未来大学) 刑部 育子 (お茶の水女子大学)

○: 発表者を表す

OR-05 日中における「鬼」の概念とその文化的解釈の差異 - 抽象化と物象化の視点 -

○セツ ジャーニー (早稲田大学基幹理工研究科)
郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)

本稿では、日中両国の文化における「鬼」概念の違いを、中国における「鬼」の抽象化、日本における物象化という、概念変換過程の対照性に注目して分析する。すなわち、物象化と抽象化の対比によって、「鬼」が持つ象徴的かつ文化的な意味をより包括的に理解する方法を探る。また認知実験によって、中国人と日本人の鬼エージェント（キャラクター）に対する印象や信頼感、そして意思決定にどのような影響を与えるかを調査した。エージェントの外見と発話内容が、参加者に対してどのように作用するかを分析した。

OR-06 クラシック音楽領域における協働的なキュレーションの可能性 - 「あちらこちら」の実践を通して -

○篠原 美奈 (東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科)

本研究では、筆者が企画制作を行う「あちらこちら」というコレクティブを事例に、クラシック音楽の協働的なキュレーションの可能性と課題について考察を行なった。「あちらこちら」は古民家や銭湯などの日常的な空間でクラシック音楽や邦楽を背景に持つ音楽家がパフォーマンスを共同制作する集団であり、その活動に関するオートエスノグラフィーを一次資料とした。メンバー内でパフォーマンスコンセプトを共有し、複数人で選曲を行う中で、予期せぬ内容の広がりを見せる過程や、音楽家自身が演奏の今日的な価値付けを行う様子が詳らかとなり、音楽と他分野を接続する新たなヒントとなり得る可能性があると考えた。

OR-07 手書き文字を用いた表現ワークショップにみる相互理解と 受容生成過程の考察 - 「浮書き」ワークショップ実践を例に -

○佐藤 あみか (札幌市立大学大学院デザイン研究科)
横溝 賢 (札幌市立大学)

今日、様々な垣根を超えてものごとを作る「共創」が注目されている。しかしその中で共に創る状況ではどの立場の人にも等しく生まれる戸惑いが生まれる。本研究は、誰手書きの記述文字を材料にした表現ワークショップを通して、参加者間に「他人以上共同体未満」の関係が形成されることを目的とする。本研究の「浮書き」WS は手書き文字を表現作品として観察、省察することで参加者間に無理のない相互受容を促す表現 WS である。役職や年齢、性別に依存しない相互理解と受容が可能になると考える。本発表では「浮書き」WS の実践を振り返り、現場にはたらいっていた知の動きと、その理論枠組みを明らかにする。

OR-08 映像制作の共創過程 - めかるみで生まれる創造 -

○岡本 誠 (公立はこだて未来大学)
刑部 育子 (お茶の水女子大学)

視覚障害支援機関、映像制作会社と第一著者である私は、按摩、鍼、灸の職業の魅力を伝える映像作品を制作した。完成した作品は好評であったが、映像制作過程はいくつかの困難があった。本研究では共創過程におきた出来事を事後インタビューや当事者が書いた論文をもとに考察した。創造のための困難（「めかるみ」）は、結果的には創造の糧となった。作品が生まれた後も、インタビューにおける対話や当事者自身が経験を問い直した論文によって、共創の過程が変容していくことが見出され、共創の新たな意味が見出された。

ORAL C

口頭発表 C

12.15 Sun

10:45-12:15

コマツ 100 周年記念ホール

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-09	「人間性中心デザイン」をめぐる共創的対話の過程	尾関 智恵 (岐阜大学) 宮田 義郎 (中京大学) 横溝 賢 (札幌市立大学) 元木 環 (公立ほこだて未来大学) 上芝 智裕 (中京大学) 近藤 秀樹 (神田外語大学) 毛利 哲也 (岐阜大学)
OR-10	Togetherness と共・創感覚 - ミラーゲームから〈てあわせ〉へ -	西 洋子 (東洋英和女学院大学) 加藤 健治 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 吉見 立也 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 霜鳥 大希 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 劉 建 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 三輪 敬之 (早稲田大学)
OR-11	仮想空間における身体所有, 操作感と感覚予測によるくすぐり感覚抑制	山口 大輔 (早稲田大学大学院) 郡司 ベギオ 幸夫 (早稲田大学)

○: 発表者を表す

OR-09 「人間性中心デザイン」をめぐる共創的対話の過程

- 尾関 智恵 (岐阜大学)
- 宮田 義郎 (中京大学)
- 横溝 賢 (札幌市立大学)
- 元木 環 (公立ほこだて未来大学)
- 上芝 智裕 (中京大学)
- 近藤 秀樹 (神田外語大学)
- 毛利 哲也 (岐阜大学)

認知科学とデザイン学は、異なる角度と方法論でデザインにアプローチしてきた。D. A. Norman らの「人間中心デザイン」は、認知科学からデザイン界に大きな影響を与えたが、バブル崩壊や気候変動などグローバルな問題に伴い、「人間性中心デザイン」への転換を提唱した。その方向性を見極めるために、両学会のメンバーで Norman 氏との対話や、全国大会 OS の準備を共に行なった。その結果、デザインだけでなく研究の在り方そのものを問い直す議論が始まっている。変化し続ける知識を使いながら創造する「共創」の価値を捉えるために、研究結果と研究過程の境界を作らないアプローチ等の新たな方向性について議論を深めたい。

OR-10 Togetherness と共・創感覚 - ミラーゲームから〈てあわせ〉へ -

- 西 洋子 (東洋英和女学院大学)
- 加藤 健治 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
- 吉見 立也 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
- 霜鳥 大希 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
- 劉 建 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
- 三輪 敬之 (早稲田大学)

自由で創造的な身体的共創での共・創感覚を身体の動きから検討するための予備的研究として、発達初期のコミュニケーションや創造性が発揮されるパフォーマンスにおける Togetherness 研究でとりあげられるミラーリングに着目し、マーカーレスのモーションキャプチャシステムを用いた全身での自由なミラーリングの計測を実現した。視覚を介したミラーリングでの共・創感覚生成には、動きの感受と実現に高い表現技術が必要となることが確認され、多様な人々を対象とする触覚を主とする共・創感覚生成のための実践技術の体系化への示唆を得た。

OR-11 仮想空間における身体所有, 操作感と感覚予測によるくすぐり感覚抑制

- 山口 大輔 (早稲田大学大学院)
- 郡司 ベギオ 幸夫 (早稲田大学)

人間は自分をくすぐっても、くすぐりたいと感じない。これは外部からの刺激と区別するため、自分自身の動きに対し予測と抑制が行われているからだということが分かっている。近年、VR 技術の発展によりユーザーは仮想空間内で現実と区別がつかないほどの没入感を体験できるようになった。これには様々な要因があるが、操作感(対象物の動きを自分が制御しているという感覚)と身体所有感(対象物を自分自身の一部と認識する感覚)の連動的上昇が主な要因と考えられる。ここでは両者を合わせて身体操作感と呼ぶ。本研究では仮想空間における身体操作感に着目し、くすぐり感覚の抑制の可能性を探る。

ORAL D

口頭発表 D

12.15 Sun

10:45-12:15

会議室

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-12	異 - 現実への誘い - 潜在するもの -	徳山 祐耀 (九州大学大学院芸術工学府) 中村 恭子 (大阪大学中之島芸術センター)
OR-13	Motivation Centered Circular Design: 座間市の事例に見る「楽しむ」が駆動する循環社会	曾我 修治 (株式会社日立製作所) 増井エドワード (株式会社リパブリック)
OR-14	自立的な営みが継起する社会的なデザイン実践 - いしやま朝市の現場で共同する汁ものづくり 「しるとする」の住民共創を通じて -	長岡 南風 (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 伊藤 悠貴 (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 横溝 賢 (札幌市立大学) 椎野 亜紀夫 (札幌市立大学)

○: 発表者を表す

OR-12 異 - 現実への誘い - 潜在するもの -

○徳山 祐耀 (九州大学大学院芸術工学府)
中村 恭子 (大阪大学中之島芸術センター)

私たちが暮らす現実に潜在する、異 - 現実という様相を考える。それは、どこまでも現実でありながら、それについての判断を宙吊りにさせ、異質なものを無際限に呼び込むような、空白域としての現実である。本研究では知覚世界外部への切符たる異 - 現実について、その表出や様相について考察しながら、そのささやかなきっかけとして著者自身による絵画制作を通しての芸術的実装を試みる。

OR-13 Motivation Centered Circular Design: 座間市の事例に見る「楽しむ」が駆動する循環社会

○曾我 修治 (株式会社日立製作所)
増井エドワード (株式会社リパブリック)

座間市はサーキュラーエコノミーの取り組みにおいて、ごみ収集のデジタルテクノロジー導入などを通じて家庭ごみ排出量の削減に成功している。この成果はテクノロジーの導入のみならず、長年の座間市クリーンセンターの組織文化の変容も相まって達成されている。本研究では文化的側面を含めた座間市サーキュラーエコノミーの成り立ちを紐解き、他地域への展開にも参照できる行動様式の仮説を提案する。

OR-14 自立的な営みが継起する社会的なデザイン実践 - いしやま朝市の現場で共同する汁ものづくり「しるとする」の住民共創を通じて -

○長岡 南風 (札幌市立大学大学院デザイン研究科)
伊藤 悠貴 (札幌市立大学大学院デザイン研究科)
横溝 賢 (札幌市立大学)
椎野 亜紀夫 (札幌市立大学)

「いしやま朝市」に大学の授業をきっかけに入り込んだ筆者が、朝市住民と共同的な他者となるべく、朝市の営みに加わり、私的枠組みの活動「しるとする」を行ってきた。活動を進めるにつれて朝市住民も営みに加わり、自分にできること、朝市にあるものを互いにもちより、現場で汁ものを振る舞う社会活動となった。本稿では、持続目的でなく、互いに無理のない関係から活動を継いでいく継起的な共同的な成り立ちをアージュ理論の視点から考察し、筆者と朝市住民相互の学習アージュと社会アージュを継起させる活動となるのではないかと結論づけた。

ORALE

口頭発表 E

12.15 Sun

14:00-15:30

コマツ 100 周年記念ホール

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-15	人びとの自然な語りをひき出す記録技法 キャラティブの実践 - 容姿を描かない キャラづくりがもたらす個別具体的物語りの可能性	佐藤 優記代 (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 渡邊 紗弓 (札幌市立大学デザイン学部) 境 美月 (札幌市立大学デザイン学部) 横溝 賢 (札幌市立大学) 井原 雅行 (理化学研究所 情報統合本部先端データサイエンス プロジェクト データサイエンスデザインチーム)
OR-16	「手間」のデザインメソッド - 現代社会における手間の意義と創造的手間の生成アプローチ -	口 テンセキ (武蔵野美術大学)
OR-17	自己類似アバターを用いた認知実験による 意思決定への影響探究	勝山 晶太 (早稲田大学) 郡司 ベギオ 幸夫 (早稲田大学)

○: 発表者を表す

OR-15 人びとの自然な語りをひき出す記録技法キャラティブの実践 - 容姿を描かないキャラづくりがもたらす個別具体的物語りの可能性

○佐藤 優記代
(札幌市立大学大学院デザイン研究科)
渡邊 紗弓 (札幌市立大学デザイン学部)
境 美月 (札幌市立大学デザイン学部)
横溝 賢 (札幌市立大学)
井原 雅行
(理化学研究所 情報統合本部先端データサイエンス
プロジェクト データサイエンスデザインチーム)

筆者は人びとが集まり自立的に活動するさまざまな現場において、そこにいる人びとの姿をデフォルメした「キャラ」として描く「キャラティブ」を継続して実践している。筆者はシンポジウムでの大規模なキャラティブ実践に向けた準備を経て、体系的にキャラティブを行うことができるようになった。シンポジウム当日の実践では、人びとの装いもつ個人のこれまでの物語が、キャラによって自然な振る舞いや語りを引き出せる要因の一つとなっていることを見出すことができた。

OR-16 「手間」のデザインメソッド - 現代社会における手間の意義と創造的手間の生成アプローチ -

○口 テンセキ (武蔵野美術大学)

本研究は、効率化が急激に進む現代社会において、人間があえて手間をかける行動の原因と意義を探究する。実践調査およびインタビューを通じて、手間を「時間」「身体」「創造」「価値」4つの要素に分類し、手間をかける行為が伴う想定外の自己の意味形成を、「創造的手間」という現象として考察する。また、天然表現と天然知能に基づく創造論を取り入れ、手間の二項対立を質的スペクトラとして分析し、「創造的手間」のデザインに関する方法論を提案する。さらに、アート表現を通じてその方法論の実践的展開を行う。

OR-17 自己類似アバターを用いた認知実験による 意思決定への影響探究

○勝山 晶太 (早稲田大学)
郡司 ベギオ 幸夫 (早稲田大学)

本稿では、Unreal Engine を活用し、被験者に酷似したアバターを用意することで、そのアバターが悪役的な性格を持つ場合、被験者がそれに反発して善行を取るのではないかと仮説を検証する。従来の研究では、アニメや漫画などに登場する悪役や英雄的なアバターを使うことで、被験者の行動に悪影響や善行動が促されることがわかっている。しかし、そのアバターは被験者自身ではないため、本研究により、自己類似アバターが自己同一性や道徳的判断に及ぼす影響を明らかにすることを目指す。

ORAL F

口頭発表 F

12.15 Sun

14:00-15:30

会議室

NO.	TITLE	SPEAKER
OR-18	現実の甲殻動物十脚類に基づくカニモデルの運動デザイン	孫 大偉 (早稲田大学) 郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)
OR-19	リビングラボの未来地図 - 人、表現、技術が創る新しい関係 -	加藤 健治 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 西 洋子 (東洋英和女学院大学) 吉見 立也 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 霜鳥 大希 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 劉 建 (国立長寿医療研究センター 健康長寿支援ロボットセンター) 三輪 敬之 (早稲田大学)
OR-20	場所に紐付く実感と人に紐づく実感を生む記録活動	田仲 麻友 (札幌市立大学大学院デザイン研究科) 横溝 賢 (札幌市立大学)

○: 発表者を表す

OR-18 現実の甲殻動物十脚類に基づくカニモデルの運動デザイン

○孫 大偉 (早稲田大学)
郡司 ペギオ 幸夫 (早稲田大学)

本稿では、3DSMAX のボーンシステムと動画機能をカニモデルに適用し、現実のカニからカニモデルの動きをデザインし、そこから動画を制作した、その方法と意義について説明する。現実のカニの多くは横歩きであるが、沖縄に棲息するミナミコメツキガニは縦歩きで移動し、大きな群れを形成する。この研究は、ゲーム内に縦歩き、横歩きを共に可能とする仮想的なカニを実装することで、動画利用者(ゲーム使用者)に違和感を感じさせ、新たな現実感を体験させるアプローチの一つである。

OR-19 リビングラボの未来地図 - 人、表現、技術が創る新しい関係 -

○加藤 健治 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
西 洋子 (東洋英和女学院大学)
吉見 立也 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
霜鳥 大希 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
劉 建 (国立長寿医療研究センター
健康長寿支援ロボットセンター)
三輪 敬之 (早稲田大学)

国立長寿医療研究センターは、高齢者の豊かな生活と健康長寿を支える技術を日常生活に近づけるため、リビングラボを開発している。リビングラボは、日常生活を模擬した環境で技術の安全性と有用性を検証し、実生活での技術評価を目的とする。今年度、日常活動や身体表現を計測できるマーカーレスモーションキャプチャ技術を開発した。この技術は光学マーカーを使わず、自然な状態で身体表現を計測できる点で進展している。本研究では健常成人を対象に、創造的表現が相互の距離感に与える影響を定量的に検証し、距離の変化と多様性を確認した。本発表では、これらの結果を基に、モビリティロボットへの応用や身体表現の自発性への影響を議論する。

OR-20 場所に紐付く実感と人に紐づく実感を生む記録活動

○田仲 麻友 (札幌市立大学大学院デザイン研究科)
横溝 賢 (札幌市立大学)

本稿は、体験の実感が生成されるプロセスを明らかにすることを目的にして、旅での特別な出会いをコラージュによって滞在中に記録するリトルプレス「まちまち」を、1人で制作する実践と、複数人で協働して制作する実践をおこなった。その結果、それぞれの場面で異なる成り立ちで実感がかたちづくられていたことがわかった。

ORGANIZING COMMITTEE

共創学会第8回年次大会

実行委員会

実行委員長	三輪 洋靖(産業技術総合研究所)
副実行委員長	植野 貴志子(ノートルダム清心女子大学)
プログラム委員長	山口 友之(筑波大学)
広報担当	澤 宏司(数々企画)
出版担当	横溝 賢(札幌市立大学), 郷 健太郎(山梨大学)
財務担当	石井 裕之(早稲田大学)
懇親会担当	秋田 有希湖(鶴見大学短期大学部), 加藤 健治(国立長寿医療研究センター)
会場担当	野口 晴子(早稲田大学), 小井塚 ななえ(東洋英和女学院大学)
大会事務局担当	三輪 洋靖
アドバイザー	三輪 敬之(早稲田大学), 西 洋子(東洋英和女学院大学), 郡司 幸夫(早稲田大学)
プログラム委員	三輪 洋靖, 植野 貴志子, 澤 宏司, 横溝 賢, 郷 健太郎, 石井 裕之, 秋田 有希湖, 加藤 健治, 野口 晴子, 小井塚 ななえ, 三輪 敬之, 西 洋子, 郡司 幸夫

共創学会
第8回年次大会
『共創テック～そこではなく、先の話をしませんか～』

発行日	2024/12/14
編集・デザイン	境美月, 高瀬愛菜, 村上璃紗, 山本愛心(五十音順)
主催・発行	共創学会
大会 URL	https://nihon-kyousou.jp/event/sfcc2024/